

創刊100周年

幼児の教育

家庭-保育所-幼稚園

2001

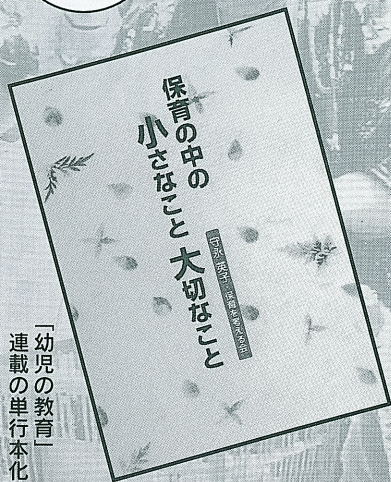
8



第一巻第一号(明治34年創刊号)表紙

第100巻 第8号 日本幼稚園協会

最新刊



「幼児の教育」
連載の単行本化

保育で大切なことは、
小さなことの中にある。

お茶の水女子大学名誉教授 津守 真
(本書「紹介のことば」より)

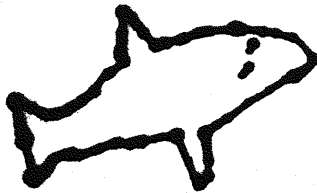
保育の中の 小さなこと大切なこと

- * 保育の中には、ちょっとしたことで、
ともすれば見過ごしてしまいがちなことの中に、
実は大切なことが含まれています。
子どもとのかかわりあふれた日常の中の
そんなことを取り上げて、なぜ大切かを考えます。
- * 子ども心に寄り添う保育とはどんな保育かを、
子どもとのかかわりから明らかにします。
- * これからの保育に何が大切かを、
豊富な保育事例から具体的に述べます。

守永英子・保育を考える会 著
A5判 224頁 定価：本体1,800円+税

幼児の教育

第100巻 第8号



幼児の教育 目次

— 第一〇〇巻 第八号 —

© 2001
日本幼稚園協会

『幼児の教育』一〇〇巻に寄せて……………	岡田 正章……………	(4)
いま、子どもたちは 試される親の本音……………	百瀬 道子……………	(10)
三歳児との出会い―大切にしたいと改めて思うこと―……………	上坂元絵里……………	(16)
私が幼児教育を志した頃(20)……………	津守 真……………	(22)
耳をすまして 目をこらして(16)……………	宮里 暁美……………	(32)



特集〈緑蔭図書紹介〉

動物たち、子どもたち

―あるいは「僕らはみんな生きている」―……………柴坂 寿子…(34)

夏休みに旅を思う……………金山 優美…(38)

人間の驚くべき能力について……………小川 了…(42)

私たちの未来を探し求めて……………小林 瑠以…(46)

「健康」再考……………首藤美香子…(50)

幼稚園誕生の時代―関信三の葛藤―

(九)『幼稚園記附録』―幼稚園とは何か……………国吉 栄…(55)

表紙絵／片柳 淳子

扉題字／津守 真

扉カット／第二十八巻第一号表紙・お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たたえ

編集委員／田代 和美・高橋 陽子・榎田 正子

編集部／仲 明子





『幼児の教育』一〇〇巻に寄せて

岡田 正章

保育史・保育研究の第一資料

わが国の明治以降の保育史の通史的な書物は、文部省による『幼稚園教育九十年史』（昭和四十四年刊）、『幼稚園教育百年史』（昭和五十四年刊）の各一卷と、日本保育学会による『日本幼児保育史』（全三六巻）とが注目される。

日本保育学会による『日本幼児保育史』は、昭和三十一年に幼稚園創立八十周年を記念して学会の共同研究「本邦幼児保育史の研究」をテーマに七人のメモバーでスタートし、十五年間の研究を経て、昭和四十三年刊の第一巻から昭和五十年刊の第六



巻までがフレールベル館から刊行された。

私もそのメンバーの一人として共同で研究し、執筆した。この共同研究において、資料として、絶大なお陰を得たものが、『幼児の教育』誌であった。昭和三十年代には、まだコピー機など便利な機械はなく、必要な部分を手書きでノートに転記しなければならなかった。多大な労力と時間を要した。しかも、『幼児の教育』誌のバックナンバーは、当時はお茶の水女子大学の図書館に揃っているだけで、勤務大学での研究日をあてて、朝九時すぎから午後五時頃まで、一日中筆稿した。必要な部分を探し出す苦勞、そして転記することによる手腕の疲れ、大変な苦勞であったが、今はよくやったとなつかしい思い出である。

しかも、この苦勞によって他の類を見ないすばらしい日本保育学会によるすぐれた『日本幼児保育史』（全六巻）が刊行できたことは、大きな貢献をしたことと自負している。

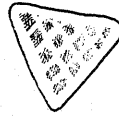
しかし、こうした共同研究が大きな成果をあげ得たその原動力に、『幼児の教育』誌に、明治・大正・昭和を通じて、他の何ものにも見出すことのできない、それぞれの時代における保育の状況、保育の論説、保育の課題が明確に収録されていたことによる。正に、保育史、保育研究のための第一資料の宝庫ということがができる。このことは、今後も変わらないであろう。また、それを期待したい。



幼稚園と保育所の関係

私のライフワークとしての研究テーマは幼稚園と保育所との関係である。このために研究成果を著書として、昭和四十五年に『日本の保育制度』（フレールベル館発行）、昭和五十七年に『保育制度の課題——保育所・幼稚園の在り方』（ぎょうせい発行）、昭和六十一年に『保育制度の展望』（ぎょうせい発行）の三書を公刊している。何れも、幼保関係研究上の基礎的文献として位置づけられていることに喜びをかみしめている。

私の保育研究の出発点は、昭和二十四年に卒業した広島文理科大学（現在の広島大学大学院修士課程）での卒業論文としてフレールベル研究にとりくんだことに始まる。その頃から、これ程大切な幼児期の保育をすべての幼児にひとしく開放しなければならぬと考え始めていた。そのことへの研究意欲が大きくゆり動かされたのは、『幼児の教育』誌第五十巻第九号（昭和二十六年）に収録された『幼児保育施設一元化問題』と題する研究報告であった。これは、日本保育学会が最初の共同研究として行なった結果を、この『幼児の教育』誌に公表したものであった。質問紙法によって保育学会員四一六人からの回答から考察したものである。そのなかの一質問「幼稚園と保育所との制度上の区別をまったく廃して法令上一つのものにするがよい」に対し、



賛成するものが幼稚園関係者で約五十一パーセント、保育所関係者で約六十六パーセント、これに反対するものが幼稚園関係者で約三十パーセント、保育所関係者で約十七パーセントであった。

それから本年が『幼児の教育』発刊一〇〇年ということで、ちようど五十年に当たる。改めて、この問題の今日的状況について拙論を投じてみたい。

本年一月、政府は、簡素・効率的・透明な政府を実現することをめざし、かねてから政府所管の諸会議・委員会で検討してきた中央省庁等の改革を行なった。そのなかで、行政改革会議では、次のような検討が行なわれている。

「幼稚園と保育所の関係は長年の懸案である。少子化が進む中で縦割り行政を続ける余裕はなく、一本化あるいは共管とすべきである。……幼稚園は教育なので長時間はできないが、保育所は生活の一環であり、両者は生活スタイルも異なる。両方の機能は必要であるが、同じ施設で両方の機能を担うこともできるはずであるのに、縦割り行政によりそれがなかなかできず、利用者の負担が増している。利用者のニーズに応じた行政が展開できるようにすべきであるとの意見があった。」

しかし、新たに発足した中央省庁のうち、保育所の所管は厚生労働省、幼稚園の所管は文部科学省であり、保育行政は従来同様縦割り行政のままとなった。行政組織を国民の望むものとするのがきわめて困難なものであることが明らかにされた。



しかし、幼稚園と保育所との関係を、幼保一元化・保育一元化のテーマのもとで長年追求している理念は普遍的である。それは、すべての幼児に、それぞれの幼児の発達に即して、ひとしく家庭・地域での教育に並び、友だちとのかかわりにおける教育を享受できるような機会を開放すべきであり、かつ、それを受けるに当たって、そのために要する費用につき、保護者負担が公正の原理に立脚したものとなるべきであるとするものである。

こうした、教育の機会均等の幼児期版を推進するに当たって、前述の理念に必ずしも立脚するものとはいえないが、わが国の少子化の進行は、国民、とくに幼児をもつ保護者の要望にこたえるべく、行政サイドに、幼稚園と保育所の垣根を低くする対応が迫られ、その過程において、幼保一元化・保育一元化の理念が具現される状況が現実化される可能性がみられてきている。

そのことは、都市と農村では、異なった様相において現われてきているが、幼稚園と保育所との垣根が低くなり、これを行政側が主導的に進めてきている。平成十年、時の文部省・厚生省はそうしたことを承認あるいは推奨するようで「幼稚園と保育所の施設の共用化等に関する指針」を共同で全国の知事教育委員会等に通知した。

農村では、同一町村に公立の幼稚園・保育所を別々に設置していたが、幼児人口の著しい減少で、両者を一園に合併し、一施設においてその役割を果たし、財政の効率



化を図ろうとしている。三歳以上児の保育は、幼稚園児が降園する時刻まで、同一年齢の幼児は幼稚園・保育所の幼児が同一クラスで行われている。

都市では、乳幼児をもつ母親のなかに、子育てと就労とを両立させるよう、長時間の保育を求めるひが増している。保護者のなかには、三歳からは幼稚園での保育を希望し、そこでの長時間保育を要請している。このため、幼稚園での預かり保育が一般化してきている。市のなかには、三歳未満児の要保育児童に対する保育所増設が財政上困難の場合、これを、定員割れの幼稚園の施設設備を改築し、ここでそのニーズにこたえようとしている。そのため市の市費を保育所に支弁すると同じように幼稚園に支出している。

このような姿で、幼稚園と保育所とは、形式的な建前としての二元化が、実質的には一元的な運営を生み出してきた。何れの型においても、長時間保育の幼児と短時間保育の幼児がともに育ち合っていく保育施設での保育の在り方を掘り下げ、幼保一元化がめざす教育の機会均等が幼児と幼児をもつ保護者に名実ともにプレゼントできる保育界を創り出したい。これから五十年後、この問題がすばらしく解決されていることを祈念したい。

(明星大学名誉教授)

いま、子どもたちは

試される親の本音

百瀬 道子

はじめに

私は卒業以来、二十五年以上、東京郊外の公民館で働いている。主に、大人の学習にかかわっていて、「幼児の教育」については知識も経験もない。それなのに、突然の原稿依頼を簡単にお受けしてしまい、実のところ、今になって戸惑っている。

る次第である。

公民館で、幼い子どもがいる女性の学習のひとつとして、その人たちの生後六カ月から三歳くらいまでの子どもたちを預かる保育室活動を担当している。その活動の主な目的は、核家族で初めての子どもと向き合っている母親たちが、子どもを身内以外の人に預けることで自分と子どもの関係

を見直したりする学習活動で、この雑誌の読者には縁の少ない話だと思う。

そこで、極私的に、自分の子どもについて書いてみようと思う。どなたも知らないのに却って都合がいい。

穏やかな日を取り戻して

二月の早朝、台所に行くと、ほんわかと温かく、ランプの点いたままのオーブンの中に膨らんだチーズケーキが入っていた。前夜「お母さんまだ寝ないの？」と娘が聞くので、何を企んでいるのかといぶかしんでいたが、私の誕生日祝いに、内緒でケーキを焼いてくれたのだった。

思い通りにはならない

娘M子は、今十七歳。金髪に染めた髪を、エクステ（エクステンション||付け毛）で長く伸ば

し、二十センチはありそうなサンダルを履き、フルメイクして出掛けて行く。父親である夫は、外で会っても声を掛けられたくないという。

事の発端は、高校二年、二期期の始業式。秋に行く中国修学旅行のため、パスポートを用意し、夏休み中茶色にしていた髪を黒いスプレーで染めて登校したところ、「黒すぎて不自然」と注意された。初めてのことでなかった。「個性を尊重し、国際感覚を養う……」という教育方針の学校だが、一度服装で烙印を押された子への「指導」は、精神的な虐待に近いものであったようだ。



娘の決断

それからしばらく、娘は自室に閉じこもった。夜中まで携帯電話で友だちと話したりしていた。目つきも暗く、すさんだ感じすらした。ちょうどそのころ十七歳の誕生日を迎えたが、お祝いの食卓を囲む雰囲気ではなく、夫は、メールを送った。

「M子さんへ

十七歳の誕生日おめでとう。M子もいろいろ大変そうだけど、自分を見失わずに頑張って下さい。お父さんは、怒ることもあるけれど、M子のことが、すごく心配になるからです。M子は、お父さんにとって、とても大事な娘です。家族のことも忘れないでいて下さい。」

面と向かって話すことの少なくなっていた父娘だが、夫のパソコンにすぐ返事が届いた。

「メールありがとう。すごい感動して涙でちゃったよ。もう十七歳なんてホントに早いと思う。しかもこの時期にまた新しい道に進もうとしているよ。学校を辞める事は何の悔いも心残りもないよ。本当に親の望まない事をしてるよね。迷惑や心配もたくさんかけているよね。ごめんさい。でもM子だって何も反抗なんてしたくないんだよ。けど結局あの学校にはもう通えないな。M子は遊ぶために辞めるんじゃないし本当に自分を見失わないで頑張るよ。M子が言える立場じゃないけど応援してほしい。(略) M子は今本当に友達に恵まれているし愛されてるんだよ。(略) 今友達に恵まれているのって親のお陰だよ！改めて本当にありがとう。メールだからこんな素直にいろいろ言えるね。これからまたきつと素直になれなくて喧嘩になることもあると思う。だけどそれは、反抗じゃないんだよ。本当にメールありがとう

う。これからまた金髪にしてもM子は、パパの娘です。」

我が家は、ふたりとも働いていたため、二十歳になった息子もM子も産休明けから保育園に通い、夫も「ママコート」を着て子どもをおぶって送迎したこともあった。大きくなってからも、サッカーや野球の観戦、映画などにも一緒に出かける気の合う父娘だった。

明るい退学

完成したばかりのデラックスな新校舎に移動して、気持ちを切り換えるかと思ったが、外見を非難するばかりで、その他を見ようとしない教師への不信とストレスで、登校時間になると腹痛を訴えるようになり、九月末に退学してしまった。学校からは親に連絡もなく、退学届の用紙を渡されただけだった。私は、文例にあった「一身上の都

合のため退学させていただきます」を無視して「貴校の教育方針が納得できないため退学させます」と記入して郵送した。

赤ちゃんに癒されて

あれから半年。同級生は高校三年生になった。M子は、退学と同時に、近所にできたばかりの小さな保育室（家庭福祉員）でアルバイトをしている。中学校の同級生の家の前にベビーカーがいつも止まっているので、どうしてかと尋ねて、ちょうどそのころ、産休明けの子どもたちを預かる保育室を始めたのを知り、早速押しかけて働き出した。

娘の二歳の誕生日に保育園から贈られたカードに「大きくなったら保母さんになりたい」と書いてある。今、その夢の仕事を得て、まだ小さな五人の赤ちゃんと過ごすことで、随分癒されている

と思う。ベビーカーに乗せて散歩に行くと、知り合いが怪訝そうに見ていたり、“ヤンママ”に間違われることもある、と楽しそうに話してくれる。預けている人の連絡ノートをみて、働く母親の不安や大変さを知ったり、改めて自分自身の保育園時代のノートを見たりしている。

先日、市役所の人が調査に来た時、見慣れない男性にびっくりした子どもたちが、大慌てでM子に抱きついてきたそうだ。夕食の時も子どもたちの様子を話してくれる。

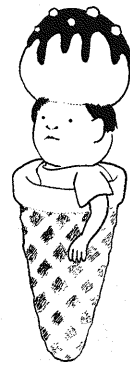
教師に傷つけられた心を、何の先入観もない赤ちゃんたちが癒してくれている。また、金髪で、鼻にピアスをつけている子を、受け止めて働かせてくださった「萌保育室」の先生や、育児経験のないM子を支えてくださっている先輩保育者、励ましてくれる赤ちゃんの親たち……。本当に、親以外の人に支えられて、M子は元気になっていっ

た。

自分のことは自分で決める

高校を辞めると言ったとき、何度も論し、「あと一年、すわっていれば、出られるのだから」とまで言った。でも、子どもだって、自分に必要な事は、自分で選び取っていくのだと、今ならわかる。『子どもの権利条約』を見るまでもなく。

最近、私の仕事「母と子の教室」の参加者の親睦会があった。一歳になったばかりから三歳くらいの子どもを保育室に預けて学習している人たちの会である。私が時々話した“金髪の娘”に会い



たいと言うので、娘を誘うとハデなかつこうで登場した。いつも自分がみている赤ちゃんと同じような子どもがいる人たちと、四時間近く一緒に過ごした。M子は臆することなく、「高校はやめてよかった。やめたから、保育室の仕事に出会えたり、将来保育さんになりたいという夢もはつきりした」と語っていた。その様子を見ていて、あれなら大丈夫、とやっと思えた。

M子は「ぴっち」

子どもたちが、小さいころ、寝る前に、一冊ずつ本を読んだ。私は、子どもたちが、一生懸命選んだ、その日の一冊を毎日記録し、その時々エピソードも記入した思い出のノートを作った。

M子がある時期とても気に入り、繰り返し選んだ本がある。M子が一歳九カ月の時に購入した

『こねこのぴっち』（岩波子どもの本）である。

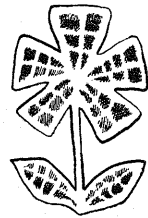
好奇心旺盛で、外へ出かけて行つては失敗したり怖い目にあつた子猫が、最後は家族や仲間によさしくされて「ぼくは、もう けっして、よそへはいくまい。ここが、いちばん いいところだ」と思うハンス・フィッシャー作、石井桃子訳の古い絵本だ。

M子の三歳上の息子は、この本がこわくて嫌いだった。つい最近、その息子が「M子は「ぴっち」なんだね。だからあの本が好きだったんだね」と言った。妙に感心してしまい、とても懐かしく思い出した。ガレージの段ボールから、十数年ぶりに、その本を探しだして見て、「そうか、M子は「ぴっち」なのか」と改めて納得してしまった。

（国分寺市立本多公民館）

三歳児との出会い

―大切にしたいと改めて思うこと―



上坂元 絵里

二年間共にすごした年長児を送り出し、五年ぶりに三歳児二十人との生活が始まった。久しぶりの三歳児の担任、幼稚園生活を一から始める心新たな気持ち、どんなふうに関わればいいのかという不安、一人ひとりを大切にしたいという願い、様々な思いを胸に抱いていた。

保育者の感覚を切り替える

年長の三学期、園庭を一周するリレーが流行っていた。私が真剣に走ってもかなわないほど、子どもたちは走るのが早くなっていた。二週もすると息があがってしまう私をよそに、何週も走る子

どもたち、大きくなつたたくましさがまぶしくさえ感じられた。

そして四月、三歳の子どもたちは、手をつなぐときについ腰をかがめてしまうほど小さい。ゆつくり歩いているつもりでも、気がつくと手をつないだまま、足がからまったようになってずりつとよろけている。『何もないのにつまずいている。

むむ、まるで私が転ばしたよう』と焦る。普通に歩いていても私のペースについて来られず、必死で追いかけて歩いてくるH夫やK子。『もつとゆつくり動かないと子どもたちは大変なんだ』と気づく。逆に、とても出来ないのではと思うことをどんだんやってしまう姿に出会うことも、例えば、体と同じくらい大きないすを庭に運び出してしまつたり。

ちよつとした場面で、自分が予想していたのと

感覚のズレを見出し、その度に修正することが続いている。過保護にするわけではないが、必要なことは手を差し伸べ、自分でできることには手を出し過ぎないようにと手探りの毎日。頭では考えて切り替えているつもりでも、身体感覚はなかなかついていけないということか。幼稚園で生活する二年ないし三年間の子どもの成長の大きさを改めて感じている。

言葉を発するまで

入園式の日、A夫は遊戯室に移動してしばらくたつてから、いよいよ耐え切れなくなったのか泣き出した。最初の印象は『身体は大きいけれど、とても不安そう』だった。初日は、庭へ出るのをきっかけに母とは何とか別れる。うさぎ小屋でうさぎを見たり、花壇のチューリップにジョーロで

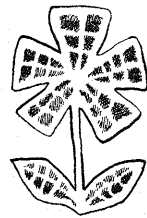
水をあげたり、保育者にくつついて過ごした。二日目、私を引っ張って行きたい方向を指さすようになる。おかえり前にトイレに行ったとき、急に泣き出し、不安だけれど頑張って持ちこたえているのだなと推測された。三日目、花壇を指さし首をかしげる。チューリップが水の重みで傾いたのを伝えたかったようだ。「チューリップがこうなっちゃったの?」と私も首を傾けた。ジェスチャーが愛らしく、私も彼の表現に倣って応えていた。

このようにA夫との関わりは、非言語的コミュニケーションから始まった。貝のようにつむった口元、訴えるような表情がA夫の緊張を伝えていた。数日後「先生、あっち」と言うようになる。日夫が「えりせんせい、お山行きたい」というのに刺激されて負けじと言い出した感じ。そんなA夫だが、母親には「今日はおかあさん帰ってもい

いよ」とか「昨日は楽しかった」と話している様子。緊張しながらも心が動き、それを言葉以外の表現で保育者に伝えようとする。

一日一日ほぐれていく心持ち、少しずつ声が出て話をするようになっていった。A夫の微妙な表現から彼の思いを感じ取ろうと、努力した数日である。小さな変化の過程を敏感にとらえることの大切さを感じた。

三歳児の保育時間は最初は一時間余り、決して長い時間ではない。しかし、その一時間に、保育者は一人ひとりの沢山の思いを感じ取ろうと実に多くのエネルギーを使い、凝縮した時を過ごす。子どもが帰ったあと、エネルギーを使い切ったような疲労感が残るのはそのためもあるだろう。また反対に、ちよつとした出来事から、いろいろな



事を感じ取り、子どもの思いに気持ちを馳せ、分かったと思える心地よさも沢山味わえる時期でもある。

名前を呼ぶ

S夫は、最初の二日間は、自分で靴を履き替え園庭に出て、砂利を拾ったり周りの様子を見たりして過ごしていた。拾った砂利を見せてくれるぐらいの関わりしもなく『気持ち安定して、自然にスタートしたのかな』と推測していた。三日目、S夫を含む四・五人と一緒に滑り台などを楽しみ『やっと、少し関わってよかった』と思っていた。翌日、母がすでに帰って少したった頃、お部屋で突然大声で泣き出す。抱き抱えるが耳が痛いほどの大きな声で泣かれる。教頭の助けもあって庭へ出て、ありを捕まえたりして気持ちを立て直す。次の日は、登園するとすぐ保育者の手

をしつかりと握り、ちよつと離れると「えりせんせい！」と呼んでくる。私はすぐに行かれない時には、せめて「はい、Sちゃん」と答えていた。

お庭に一緒に行きたいというS夫の求めにやっと応じて、手をつないで庭に出ると「えーりせんせい」と節回しをつけて何度も呼んでくる。その度に私も「Sちゃん」と、同じ節回しで答える。S夫とやつと少し気持ちが近づいたと感じるほんわり幸せなひとときだった。

私は、子どもの名前を心を込めて呼ぶことで、一人ひとりの子どもと保育者である私とのつながりを築いていく小さな手がかりになるのではと考えていた。入園の日から意識して、子どもたちの名前を何度も呼ぶようにしていた。子どもの側からも、先生の名前を呼ぶことは、同じような意味があるのかなと手ごたえを感じたやりとりだった。

話を聞く

入園式の日、小さい組の子どもたちは、一番前の席に座った。教頭先生が前に立ち、マイクで話をするのでW子は食い入るような視線で見ている。

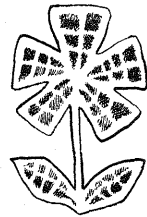
十日後、初めての発育測定で保健室に移動する。絨毯にぺたっと座った子どもたち。養護のM教諭が説明を始めると、目を皿のようにして微動だにせず話を聞いていた。初めての経験、何が始まるのだろうかと注目する子どもたちの思いが伝わってきた。その様子は何とも可愛らしかった。がそれ以上に何か強烈な印象を残した。幼い人達の新しい刺激を吸収する力強さ、「集中力」などという言葉では表現しきれないもつと大きな力を感じた。

まっさらな子どもたちに関わる大人として、ど

んな語りかけ方をしているのか、その影響の深さをひしひしと感じたひとこまだった。本当に伝えたいことを、言葉を選んで伝えて行くことを心がけよう、たくさんの言葉をシャワーのように子どもたちに浴びせて、話を聞けない子どもたちにしてしまうことがないように、と自分に言い聞かせたのである。

一人ひとりを大切にすること

話はまた昨年のことに戻るが、M夫とのやりとりが思い出される。一月、年長児たちは白木の独楽（ひもで回すもの）に色をつけて、回せるようになりたいと一生懸命挑戦していた。R夫やS夫は、次々とひもで回せるようになってきたが、M夫はなかなか出来ない。M夫は出来ない理由を独



樂のせいにして、自分の独樂とS夫のをじつと見比べていた。M夫は「ここが、ちょっと長すぎない？」と私に訴えた。見てみると、確かに芯の棒のつきかたがほんのちよつと違うようだ。M夫のは一ミリ位上が長い。私は、そのことだけが原因ではないけれどと思いつつ「じゃあ、直してみよう」と材料室から小さなこぎりを探してきた。

私がおこぎりで切るのをじつと見ていたM夫、終わって独樂を渡すと身体ごと弾むようにS夫たちの方へ走りだした。その時、ぱつときびすを返して「ありがとう」と笑顔でひとこと。

後から考えると、何ものこぎりで切るほどの事ではなくトンカチでちよつと叩けばよかったのだが、その時はとっさに思いつかなかつた。だがM夫にとって、方法が問題ではなく『棒の位置が変われば、僕も出来るようになるのでは？ だから何とかしたい』という彼の思いに、私があればこれ

意図的に考えずストレートに付きあつたことが意味があつたのではないかと思う。私にとつて一人ひとりを大切にすることかと思つた出来事のひとつである。

保育中のできごとを羅列する形になつたが、毎日の生活でこつた瞬間を重ねていきたい。保育の中で得た手ごたえや実感を糧に、今ここにいる子どもたちと大切に向き合っていきたい。

新しい生活の始まりには希望を持って意欲的になる。けれども一方で、すぐに慣れてしまつて鈍感になつたり独断的になつたりしてしまう。保育者としての暮らしが十年を越えて、私はこんなことも今更に慎重に考えたいと思つている。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)



私が幼児教育を志した頃(20)

津守 真

一九五二年秋—進歩主義教育

私はミネソタ大学でDr.エリザベス・メチャム・フラーの幼児教育の演習を引き続きとりつづけていたが、学生たちには幼児教育よりも、新しく台頭してきた心理学の方が人気があつて、彼女の幼児教育演習をとる学生は少なかった。当時の米国では進歩主義教育の実践は多くの幼稚園に浸透していて、どの幼稚園でも遊びが主流であつた。ミネソタ大学児童研究所長を二十五年間もつとめておられたDr.ジョン・E・アンダーソンは科学的方法論については厳密さを要求したが、幼児の生活には理解があり、子どもの遊びを支えることが児童心理学の当然の任務と考えていた。Dr.アンダーソンはホワイトハウスカンファランスの委員もして、第二次世界大戦直後の米国教育研究報告書一九



四六年版の幼児教育の部の執筆者であった。

私は前から何度も書いたように、進歩主義教育がどのようにして発展してきたのかに関心があり、キングダーガルトン・メッセンジャー、キングダーガルトン・レヴューなど、日本では到底見ることはできない幼児教育の文献がミネソタ大学図書館にあるのを知って、時間を作っては図書館で興味のある部分を筆写していて、その論文を完成したいと考えていた。一九五二年十月半ば、私は進歩主義教育の歴史のアウトラインを作って Dr. フラーに見せたところ、「あなたはどこでこのような研究法を勉強したのか、日本の大学は良い教育をしている」と彼女は直ちに言った。当時の日本の大学では自分の興味を追求することが学問の前提と考えられていたから、学生は大学で授業に出るよりも、図書館や実験室で過ごす方が重要と考える気風があった。米国の大学は知識は広くなるけれどもその点で物足りなかった。私はお茶の水女子大学附属幼稚園の歴史を語り、遊びを幼児教育の根本と考えれば、米国の進歩主義教育運動は実に興味深い、日本の幼稚園教育の指導者倉橋惣三はパティ・ヒルやスタンレー・ホールの影響を受けていることを Dr. フラーに述べた。(この頃倉橋先生は「子供讃歌」を『幼児の教育』誌に連載しておられ、父が毎月送ってくれるその雑誌を私は読んでいた。)

十一月の末のある日、午後三時から Dr. フラーの演習のあと、彼女と一緒に教室を出て歩きながら、彼女は、ジョン・デューイが最近死んだ、モンテッソリも死んで寂しくなったと言った。デューイの教授生活の振り出しはミネソタ大学で、ここからシカゴ大



学、コロンビア大学に移ったのである。キャンパスのメンバーの並木が夕陽に赤く映えていた。戦争も終わってひとつの時代が通りすぎようとしていることを私共は思った。

一九五二年十二月半ばに私は指導教官のDr.ハリスと、研究所長のDr.アンダーソンとDr.フラーとの連名で児童研究所の所長室に呼ばれた。私はこわごわ行ったところ、この論文を学位審査に正式に受理することに決定したと告げられ、期日までに所定の用紙にタイプで打って提出するようにと言われた。幼児教育における進歩主義教育の歴史を扱った書物は一九〇七年以来なかったもので、そのことも有利だったのだと思う。

(その後、一九五五年に進歩主義教育協会が解散された。更に後に、一九六八年にハリス教授が日本に來られたとき、私が進歩主義教育に関心があったからとローレンス・A・クレミン著『学校の変貌、アメリカの教育における進歩主義一八七六一一九五七』(一九六一年出版)を土産にもつてきて下さった。そして『児童教育に挺身した不屈な婦人たち一八五六—一九三一』がACEIから出版されたのは一九七二年である。その後の米国の幼児教育の展開は複雑である。それにもかかわらず、進歩主義教育運動は幼児教育における遊びの復権という意味をもち、現代にも重要性を失っていないと思う。)

Dr.フラーはそれから間もなく自動車事故で突然に亡くなった。

ピルグリムファウンデーション(キリスト者学生会館)をめぐる人々

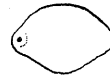
私は一度勉強に専念しなければ論文を完成することはできないと考え、そのために家



庭遍歴を中断して、ピルグリムファウンデーションに泊まることにした。一九五二年十一月十三日、トームス夫妻の自動車に荷物を積んで、ピルグリムファウンデーションに引越した。ピルグリムファウンデーションは学生のクラブだから、他人に煩わされることなく勉強できた。しかしそれなりにいろいろの方にお世話になったし、そこに集まる人たちは興味深かった。

若夫妻―シユタウファー夫妻

三階の私の部屋の隣には、私と同年配の新婚早々のシユタウファー夫妻が住んでいて、毎日電気掃除機をかけ、芝生を刈り、建物の管理をしていた。リー・シユタウファーは保健学科の学生で、奥さんのダナは看護学科でオキュベーションセラピーを勉強していた。まるでハリウッド映画から出てきたような若夫婦だった。私共は食事は一階のキッチンでめいめい作るので、彼等がチリビーンズやチャップスイを作ると私の鍋に分けてくれた。リーはネブラスカの出身で、クリスマスの休暇のときには故郷に帰るので、そのときには大きな建物の中に私は一人になり勉強するには有難かった。何よりも有難かったのは、タイプライターを使わせてくれたことだった。論文を仕上げる間約三カ月彼等の新しいタイプライターをほとんど専用に使ったのに彼等は一言も文句



を言わなかった。それから長い年月の後にリーはミネソタ大学の保健学部の学部長になり、ダナは自分の家にアトリエをもって絵を描いていた。四人の子どもはいまは成長し、夫婦は気候の良いフロリダに移住した。

レヴェラント・ケンネス・ウエード

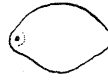
ピルグリムファウンデーションには学生のための専任の牧師がいて、二階にオフィスがあった。端正なアメリカ人牧師で、北川先生やサイデイ牧師のような大胆なところがなくて、常識家だった。学生たちと読書会をしていて、テキストにトルーパーッドの本を使った。それはあまりにもアメリカ的オブティミズムで、戦時中に苦勞された矢内原先生の聖書研究に出席していた私には物足りなくて、レヴェラント・ウエードとはよく議論をした。彼は私の話すことに辛抱強く耳を傾けてくれた。私共は最後まで友人であった。

学生たち

ピルグリムファウンデーションにはかなりの人数の若い学生たちが集まった。女の子と遊ぶために集まってくる学生も多かったが、その人たちも、聖書研究会ではよくしゃべり、まじめな会合のあとには、スクウエアダンスをした。夜遅くに帰るとき、だれとだれとが一緒の車で帰るかを見てみると交友関係が分かって面白かった。政治学専攻の



大学院学生のポウルは、敗戦時の日本では東久邇宮首相が一億総懺悔ということを行ったが本当かと私に尋ねた。私にはまだ記憶に新しかったことで、戦時中の言論について日本人のだれもが多かれ少なかれ反省していたのは事実だと言った。青年も軍部に対して心の中では批判しても、恐れて口に出さなかったことを反省したことを述べた。彼はそれでは責任ある人々が何も反省していないにひとしい、いまにこれは反米になると言った。後になって私は彼が皮肉をこめて言ったことは当たっていたのではないかと何度も考えた。ピルグリムファウンデーションに集まる学生のなかには、アメリカの機械文明を批判してキリスト教はどう答えるのかと議論する学生もいた。まだコンピューターは登場して、環境問題も意識されていない時代であった。そういう人たちも皆、ミネソタ湖畔の一泊修養会には参加して、夜になるとキャンプファイアでカントリーやニグロスビリチュアルを歌った。これが一九五〇年代のアメリカの青年の一側面だ、だれにも親切で、善良な人々であることがよく分かり、気持ちよかった。だが、敗戦を体験してきた日本の学生とは背景があまりにもかけはなれているのを感じた。建築専攻のピート・ノーラムは、現代的な若者だが、宗教心があつく、ピルグリムファウンデーションでは中心的な役割を果たしていた。夜の会合で遅くなると私を家まで送ってくれた。そのピートの車にいつの頃からか女の子が一緒に乗って帰るようになった。セントポールキャンパスの食物学科の学生のベティ・ブレッケンリッジで、料理が得意だった。この人が来るとおいしいパイが食べさせてもらえて、この人がいると皆が落ち



着いた気分になった。間もなく私は彼女の父親がミネソタ大学の自然博物館の館長なのを知った。一年前に私をはじめミネソタ大学にきたとき、サイディ牧師に紹介され、世界的に有名な鳥類学者なのに少しも偉らぶるところがなかった。ベティは、ビルグリムファウンデーションでピートと並んで礼拝の司会をした。私がミネソタを去って間もなく二人は結婚した。ずっと後、一九八五年に私共がミネソタに行ったとき、二人の家に招かれた。子どもが二人いて明るく賑やかな気分があった。ピートは建築家で、ミネアポリスの古い建築物の保存に一生懸命になっていた。ミネソタのコングレゲーション教会の信徒代表をしていた。ベティはアメリカ家政学会の役員をしていたが、「大きな森の小さな家」で有名なローラ・インガルス・ワイルダーの研究家で、彼の家のひと部屋がインガルスの記念室になっており、あの時代の食器や家具などが陳列されていた。それから間もなくベティが死んだという知らせを受けた。私がアメリカに行く度に彼等はビルグリムファウンデーションの同窓会をしてくれたり会いに来てくれた。ベティの葬儀には彼女の好きだった芝居的一幕が上演されたという。ピートは目を赤くして言った。

若い音楽家

ビルグリムファウンデーションでは大学から帰る時間も自分の自由だったから、私は図書館に夜遅くまでいることがしばしばだった。ある寒い晩に、外套の襟を立ててキャ



ンバスを歩いて帰ってくると、東洋人の青年に出会った。私が声をかけると日本からの夏来たばかりの十九歳のピアニストで、楽譜を筆写してアルバイトをしていた。久し振りにあった日本人にとっても懐かしく感じた。翌日に早速ピルグリムファウンデーションに昼食に誘った。シヨパンやシューベルトのピアノ曲だけでなくベートーベンのピアノコンチェルトまでも頼めばすぐに弾いてくれてだれもが驚嘆した。後に現代音楽で世界的に有名になった一柳慧である。「とっし」と私共は呼んでいた。一晚私はとっしをトームス家に連れていった。トームスさんの母親がピアニストで、トームスさんは音楽が好きだった。夕飯をご馳走になってピアノを一杯弾いてもらった。その日最後に彼が十五歳のときの作曲の第三楽章を弾いた。音楽は国境を越えて力があることを私は身近に感じた。トームス夫人は私たちが泊まってゆくようにベッドの用意をしておいてくれたのに、私は論文の資料をピルグリムファウンデーションに置いてきたのでそれを断って帰った。私は自分の母とのやりとりを思い出した。

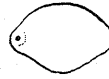
アーミステイス・デー

一九五二年は朝鮮戦争の最中で、トルーマン大統領は朝鮮に原爆を使用するという噂も流れていた。日本は隣国だからただではすまないだろうと私は心配した。十一月十一日は休戦日（アーミステイス・デー）とすることが米朝間に合意されて私は胸を撫で下ろした。その日は学校は休みになった。



ヴィザの書換え—シカゴ

米国に来てから一年経過し、ヴィザの切り替えのために、ミネアポリスの隣の市セントポウル日本領事館に行ったところ、平和条約が発効になって、それ以前のヴィザはすべて無効になり、移転になったシカゴの日本領事館にできるだけ早く行くようにと言われた。シカゴには汽車で十時間、バスで十二時間かかる。勿論飛行機で行くことなど当時の留学生には考えられもなかった。十一月二十七日の夜十一時の汽車でミネアポリスを出発し翌朝シカゴに着いた。午前中にヴィザの手続きをすっかり済ませたときには安心した。異国では思いがけないことで心を乱される。予め私の婚約者の父親の知り合いの日本人一世の塚原さんに手紙をだしてあり、クラークストリートという下町のアパートの二階の家を訪ねた。薄暗い応接間で初対面の塚原さんに挨拶をしたとき、そこに東洋英和短大の保育科の黒田成子さんがおられるのに気がつき、互いにあつと驚いた。黒田さんとは、二年ほど前に東洋英和の学生が愛育研究所に見学に来られてそれ以来知っていた。当時黒田成子さんはシカゴ郊外のエヴァンストンにあるナシヨナルカレッジという幼児教育で有名な学校で勉強しておられた。知らない土地で友人に会うほどうれしいことはない。それにしてもたった一日しかない土地で、どうして黒田さんに会ったのだろう。長い間不思議に思っていたので、この原稿を書いているとき黒田先生に電話した。黒田先生は父上がアメリカで牧師をしておられた関係で塚原さんを知っておられ、たまたまたった一日訪ねて偶然に私と会ったのだという。その後五十年間に



わたる交友を思うと不思議な出会いだった。その晩は塚原さんにもほんものの寿司をこ
馳走になり、日本人の一世と二世にあらためて尊敬の念を深くした。

私はDr. フラーからシカゴのノースウエスタン大学図書館に紹介状をもらっていた。ミ
ネソタ大学図書館にはなかった資料を見つけて丸一日そこで過ごし翌日の夜行でミネ
アポリスに帰った。

洗濯物

私がビルグリムファウンデーションに移って以来、トームス夫人は私の洗濯物を心配
して、私が毎週一抱え洗濯物をトームス家に持って行くと、すっかり洗って、アイロン
をかけ、届けて下さった。その度に果物とクッキーが籠の中に入っていた。いつもト
ームス夫人はだまっておいて帰ったところ、籠をおいて帰ってしまうのでまるでサンタク
ロースのようだった。いま考えても感謝の念に満たされる。

一九五二年のクリスマスは、シユタウファ夫妻はネブラスカに帰り、ビルグリムファ
ウンデーションには私一人だった。私はクリスマスディナーへの招待をすべて断って、
「とっし」と、もうひとりの日本人留学生で化学専攻の島内さんをビルグリムファウン
デーションに招いた。「とっし」が古典から最近代までのいろいろな曲を解説つきで弾
いてくれた。たった三人の豪華なクリスマスだった。

目をこらひて (16)



我が家の次男・耕太が一歳の頃のこと。

保育園の連絡ノートに「水をいやがります。浴槽に入れようとすると足をちぢめて泣きます」と書かれていたことがあった。家でお風呂に入る時は、たいてい機嫌良く入っていたので、とても意外な気がした。

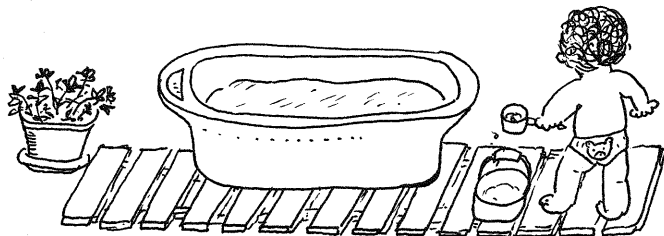
このことが頭に残っていて次の休日、ベランダにベビーバスを出してやってみることにした。

ベビーバスに水を入れ、まず耕太をひよいっと持ち上げて中に入れようとしたら、果たして、泣きました！ 泣きました！ 大きな声で泣きました。

「へー、本当なんだ！」と妙に感心してしまう私。長男も水を怖がっていた時期があったから似たのかなあ、なんて考えながらしばらくそのまま放っておくことにした。せっかくだから夏の太陽を浴びながらベランダで遊ばばいい、と思いがら。

私も耕太のそばで、プランターの花に水をかけたり洗濯物を干したりしていた。

ゆっくり時間が流れていた。



ベランダで... ゆっくりしっかり自分で遊び出した 耕太(1才)



耳をすまして

しばらく経った頃、バシヤバシヤと水を触る音が聞こえてきた。耕太が水で遊び始めたのだ。

顔にバシヤバシヤと水をかけ次には水に濡れた手を顔にペチャペチャと当てたりして、それを何回もやるとやおらヨッコラショと足を持ち上げ、水の中に自分から入っていったのだった。

水の中はとびきり気持ちよかったのだろう。出たり入ったりを繰り返しながら遊び続けた。

*

持ち上げられて入れられたプールは怖いけれど、面白くなって自分から入ってみたプールは楽しくてしょうがない。同じプールなのに『させられる』と急に不安な気持ちになる。

状況の中で、子どもの行動が生まれている。状況が変われば子どもの行動も変わる。それを知るためには、長く見ていなければ分からない。子どもの心に寄り添って見ていなければ分からない。やっぱりこうして目をこらす。

絵と文 宮里暁美 (目黒区立ふどう幼稚園)



結局、体中び
食べとしま。



自分で! がとにかく好き!

表情が
ちがう。



食べさせられるのはきらい
かたあこしほ 耕太

10歳年上の
ひきごとの
そういえば...

特集 〈緑蔭図書紹介〉

動物たち、子どもたち

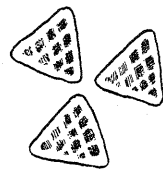
—あるいは「僕らはみんな生きている」—

柴坂 寿子

私は一度保育学会のシンポジウムで、話題提供者の一人として子どもの仲間関係について話したことがある。その折り、コメンテーターであった津守真氏が、私のことを「もともと動物の研究から来た人で……」というようなことを、嬉しそうに紹介してくださった。その楽しい調子を私自身も嬉しく思

う一方、心の中では小さなさざ波も立った。

というのは、今までの私の体験では、初めてお会いする保育者・研究者の方たちは、私のルーツが動物行動学・比較行動学であることが分かった途端、身を引くことが多いからである。「子どもたちを動物扱いするのか」という警戒のまなざしなのだろう



か。一挙に「遺伝決定論」「社会ダーウィニズム」といったおどろおどろしいレッテルが貼られた苦い体験もある。「動物の飼育を通して命の大切さの教育を」などとふだんはおっしゃってるのになあと、不思議にさえ思う。裏返せば、やっぱり多くの方たちにとって人間は高等で、他の動物は下等なものなのだろうか？ 人間は複雑で、他の動物は単純なものだろうか？ 人間だけが特別で他の動物は十把一絡げということなのだろうか？ 動物たちの姿を生で見たり、動物たちの生活が綴られた本を読んでいると、「生きている」ことに関して、人間だけが高等とか、複雑とか、特別とか、私にはとても思えないのだけれど。

『うちのカメ』（石川良輔、八坂書房、一九九四年）は、三十五年間人と一緒に暮らしてきたカメの記録である。その中で一番印象的なのは、著者たちご夫婦にとってカメが大事な家族であるだけでは

なく、カメにとってもご夫婦が「大事な存在」らしいことである。石川氏が夕食を取っていると、カメは足元にまとわりついて膝に乗せて貰い、ソファに移るとカメもすぐそちらにやってくる。旅行からしばらくぶりで帰ってくるといつもよりしつこくまとわりついて、膝に乗せるといつまでもべたべたくっついていく。名前を呼べば瞬きしたり、振り向くようにもなったという。居眠りをしている石川氏のお腹の上でカメも寝ているスケッチには、なんだかほのぼのしてしまった。

『ラット一家と暮らしてみたら』（服部ゆう子、岩波書店、二〇〇〇年）では、人間と暮らすラットたちが、その子育ての様子を中心に描かれている。どのラットも巣作りが達者で、その巧妙さには感心させられる。その一方で性格はどのラットもとても个性的で、一匹一匹がそれぞれの名前で見えてくるようだ。特に面白かったのは雄が子育てに関

わる様子が多様なことだ。雌に追い出されて子どもに近づけないような雄や、子どもには目もくれない雄もいれば、保父さん代わりをする雄もいる。なかでも父親ではない雄が子どもたちを世話するようになり、雌が事故で死んでからは母親代わりになったというエピソードでは雄のかがいしさが印象的である。十匹以上いる子どもたちが次から次に雄の腹の下に潜り込んでくると、雄は子どもたちを一生懸命嘗めてやる。子どもたちは雄の腹の皮や毛を乳首代わりにくわえている。やがて空腹に耐えられなくなった子どもたちがミルクの皿に移動すると、雄はほっとしたように自分の乱れた毛をグルーミングするのである。

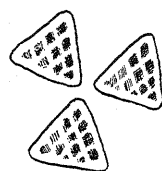
『森に生まれた愛の物語』（ジェーン・グドール

Ⅱ文 アラン・マークスⅡ絵、講談社、一九九八年）では、四十年近くアフリカのチンパンジーの観察研究を続けているジェーン・グドールがチンパン

ジーたちの思い出深いエピソードを語っている。その中で私が一番好きなのが、デイビッド老人の話だ。デイビッドを追っていたジェーンの前

で、デイビッドは警戒する様子もなく眠り始める。

自分は信頼されていると感動したジェーンが、やがて起きあがったデイビッドに、思わずアブラヤシの赤い実を渡そうとする。初め、デイビッドはそっぽを向く。ジェーンがなおも渡そうとすると、デイビッドは実を受け取り、ジェーンの手をしっかりと握って、ジェーンの目を覗き込み、手を離し、実を落とすという。ジェーンは「(私には) すぐに分りました。彼は私の贈り物は受け取らなかつたけれど、気持ちを受け取ってくれたのです」と書いている。この話を読んだとき、私は我が「同居人」だったハムスターを思い出した。最期の頃、餌が食べら



れなくなつて、私が無理に食べさせようとしたら、手を軽く噛んで拒んだ。巣箱に戻してやると、ねぐらに潜り込んで出てこなくなつたが、夜になつてひよこつと顔を出してこちらの顔を見ると、またすぐ引つ込んだ。そして次の日の朝、ねぐらの中で往生していた。不思議だつたけれど、あれは最期の覚悟を決めてのご挨拶だつたに違いないと思う。動物の擬人化とか、単純な動物の行動を複雑に説明しているとか言う人もいるだろう。でもジェーンに倣つて、「私には分かりました」と言つておこう。

『ことばをおぼえたチンパンジー』（松沢哲朗 文、藪内正幸 絵、福音館書店、一九八五年）では、京都大学霊長類研究所の有名チンパンジー、アイについて、アイとの実験を続けてきた松沢哲朗氏が語っている。アイはどれくらいもの名前を覚えられるのか、数が数えられるのか、といったテストを受けている。でもこうしたテストはあくまでも人間にとつ

て重要な能力についてのテストであり、それをチンパンジーがどれくらいできるのか、こうした点でどれくらい人間に近いのかというテストである。それができないことがチンパンジーが人間に劣っているということではないはずだ。松沢氏は次のように書いている。「……でも、物の名前や色の名前に比べると、数はちよつと難しい。……アフリカの森で暮らすチンパンジーには細かい数などどうでもよいのかもしれない。木になつている実が大好きなイチジクの実なのか違うのか？ イチジクだとしてそれが赤くて熟れて食べ頃なのかまだ青いのか？ 物の形や色を見分けることは、チンパンジーにとつて、とても大切です。でも実の数が三個か四個かというのはきつとどうでもいいことなのでしょう。いつもイチジクはたくさんの実を結ぶのですから」。この本の最後は、夕日に照らされて、手をつないだ松沢氏とアイの二つの影が伸びている静かな風景であ

る。松沢氏は「こんな時、決して人だけが特別な動物ではないのだなあと思います」と綴っている。

私はこうした動物たちの記録を読んだり、ご近所の犬や猫、小鳥に、ちよつと遊んで貰つたりしている時が一番人間らしい気持ちになる。人間らしいと

いうより生きものらしいという方が適切かもしれない。「僕らはみんな生きている」。動物たちの間で心地よいのも、子どもたちの間で心地よいのも、私にとつては等しくそういうことなのだと思う。

(お茶の水女子大学)

夏休みに旅を思う

金山 優美

夏休みがやってくる。この時期、まとまった休みが取れ、旅行を計画されている方も多いことと思う。

そんなわけで私がご紹介するのは、元日本航空のパイロットである田口美貴夫氏書いた『機長の一日』、『機長の七百万マイル』(講談社)と

いうエッセイ集である。

国際便の機長として、世界中を飛び回ってきた著者が、これまで経験した様々なエピソードをまとめたものだ。『機長の二万日』のほうが先に出版され、売上は七万部を突破したと聞く。続編の『機長の七百万マイル』も発刊二ヶ月で増刷されていて、どちらも人気があるようだ。

機長やスチュワーデスの書いた本というのは、他にもいくつか出版されているようだが、私はこの著者のものが面白いと思った。文章も読みやすく、気軽に読める。

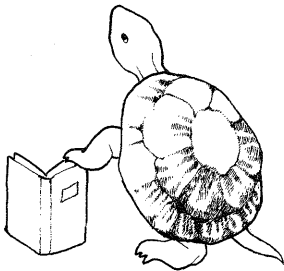
どちらの本も、内容は飛行機の操縦にまつわることから、機内のトイレや食事に関わる意外な話など、乗務員ならではの裏話が盛りだくさんで、楽しめた。

著者は操縦歴三十六年で、浩宮さまをはじめVIフライトの経験も多いが、搭乗客の思い出で面白

いのは、故・大屋政子さんの話である。あの奇抜なファッションに関わることや、乗務員が揃ってバレエ観劇に招待されたことなど、エピソードは幅広い。

その他フライト先でのアクシデントや、謎の物体との遭遇（もちろん高度数万メートルの空中で、である）などの不思議な体験もあつて、読者を飽きさせない。

また、機上から見える、アラスカやシベリアの大自然の記述も心をひかれた。空から見おろす高峰マツキンレーや冬のオーロラなど、コックピットからの絶景に息をのむ話には、（ああ、私もそんな景色を見



てみたい!」と、うらやましく思う限りである。

しかし同時に、安全なフライトのために並々ならぬ努力をされている様子も、随所に窺える。私たちの知らない所で、こんな苦労があるのだなあと驚かされる。

高いビルのような積乱雲をかすめたり、機器のトラブルのためにヒヤリとさせられたり……。そんなこともきつと、著者に限らず、多くのパイロットにとつて一度や二度ではないのだろう。

私は実家が北海道なので、よく飛行機を利用する。空港で搭乗を待つ間、私は飛行機を見るたびに思うのだが、こんな大きな塊がなぜ飛ぶのか、素朴に感心せずにはいられない。それを「飛ばす」立場の多くの方々が、この著者のように日夜、仕事に精励されておられることに、感謝の念を覚える。

とくに乗務員というと、きりりとした制服姿や華やかなイメージが先に立つが、著書からは、厳しい

職人魂のようなものが感じられた。

そのこだわりを知ると、手荷物検査など手続きのわずらわしさや、きゅうくつな座席ベルトも、安全な旅のためなら協力を惜しみません、という気持ちにさせられる。

というのも、機内では「お客様」がらみのトラブルもあつて、乗務員もいろいろ大変だなと思うくらいが出てくる。いわゆる「困った乗客」というのは、不慣れなことが原因の場合もあるのだろうが、乗客のマナーというものも考えさせられた。

例えば、こんな話が載っていた。

コックピットで、原因不明の計器トラブルが発生する。懸命に調査するがどうしても回復できない。ふと思ひ立って、客席で携帯電話を使っていないか確認させると、案の定それが原因だったという話。

あるいは、乗り継ぎ便の設定に時間の余裕がなく、かけこみ搭乗(?)で、出発を遅らせてしまう

乗客や、それまで悠然と座っていたのに、ベルトのサインがついたとたんにトイレに行きたくなり、無理やり席を立つ乗客……等々。

飛行機に乗るということは、いろいろ制約も多くて不便なこともあり、それだけでなく乗務員のお世話になる。何よりも乗客の安全をと心を砕く人たちに、必要以上に面倒をかけてはいけないなあ、と思ったりした。

今年の夏も、たくさんの人々が国内、国外を問わず旅行に出かけることだろう。空港の混雑も、またニュースで報じられるに違いない。

ご紹介した二冊については、エッセイとして面白だけでなく、飛行機で旅する場合のちょっとしたアドバイスも入っている。飛行機に乗る予定があるなら、ぜひ読まれてみてはどうだろう。どうせ乗るなら、賢く利用したいという方には、おすすめであ

る。今まで知らなかった、新たな発見があるかもしれない。

もちろん、そんな予定のない方でも、十分楽しめる本である。いつか旅する日を夢みて読むのもいいと思う。

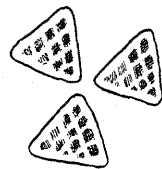
日常から離れ、違う世界に身を置くことが旅の楽しさだとするならば、読書もまた旅のような側面を持つている。この本に限らず、読書することで、しばしだけは旅に出られるのではないだろうか。

どこにも出かけずとも、ゆっくり、のんびり、本のページをめくる——それも、すてきな時間だと思う。

どうぞ、皆様よい夏休みを……。

(町田市在住)

人間の驚くべき能力について



小川 了

警女^{ごせ}おりんが脱走兵右淵平太郎に出会ったのは大正七年（一九一八年）四月二十一日の夕刻、東川（新潟県内）の阿弥陀堂のことであった。警女とは「ひと口にいつて、盲目の女旅芸人のこと」である。警女は普通、数人で仲間を作り一定の住居に集団で生活をし、時期を決めて旅に出るのであるが、おりんは「はなれ」である。警女の集団には驚くべき厳しい掟があり、生涯独身であることが要求され

ると言う。しかし、旅の途次で男と出会うのはいうまでもなく、また「年まわりがきて、性の目ざめがあれば、自然と男を恋うる心が出てくる」のも当然であり、そうして男と交わったことが仲間には知られ「落とされる」、つまり仲間から外され、はなれ警女として以降、一人で放浪、門付けをすることになる。

大正七年、つまりシベリア出兵がおこなわれてい

るさなか、米騒動も起き、物情騒然としていた。そのような時期において、兵営脱走は死罪に匹敵する重罪であった。おりんが阿弥陀堂に来たのはもちろんそこで一夜を過ごすためであるが、そこに平太郎がいたというわけである。平太郎は「瞽女さんや。おまんも、喰わねか」といって、にぎりめしを差し出している。平太郎はしかし、おりんの身体には決して触れようとしなかった。二人はその後、兄と妹ということにし、平太郎がもつ下駄作りの技を頼りに各地を渡ってゆくのである。

まことにもの悲しい結末を迎えることになるこの物語そのものは、若狭にのこる恵林地蔵にまつわる言い伝えをもとに、水上勉が「在所もあかさずに死んだ盲女への鎮魂歌」として創作したということになっている。ただ、読者としていえば、この物語には全くの創作とはいえない、多くの真実が含まれていることは疑い得ない。文学のもつ虚構性が人生の

真実そのものを語るといつてしまえばそれまでであるが、読者はこの物語の中に深く人の胸を打つ多くの真実を見いだすであろう。この物語はまた、篠田正浩監督により同名の映画になっている。こちらも忘れたい名画である。

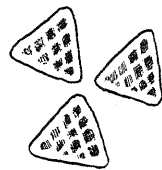
創作上のおりんさんが平太郎に出会った時、実際に瞽女として生涯を送った小林ハルさんは十七歳か十八歳の頃である。越前のかなり裕福な農家に末っ子として生まれたハルさんは生後百日ほどでそこひ（白内障）になり、視力を失った。明治の時代である。五歳で瞽女にもられるまで「寝間におかれ」そこで三度のご飯を食べていた。「ハルと呼ばれなかったら声を出さないよ」といわれ、一人でじつと寝間にいる自分を「本当にいい子だ」とハルさんは思っていたという。「お祭りの太鼓が聞こえても、子どもの遊ぶ声がしても、私は遊ぶことを知らなかったから、別に行ってみたくとも思わな

かったし、目が見えないから、家の人は誰もよそへ連れていってくれなかった」と語っておられる。

水上勉によると、この時代「もつとも賤しいとされる盲目芸人」といわれた瞽女さんになるための修行がいかに厳しいものであるか、生きるか死ぬかの境目を、ののしられ、棒で打たれながら文字通り手探りで這っていく容赦のないものであることを、わたしたちは小林ハルさんの語りによって知ることになる。第一、瞽女さんの修行はタダではないのである。「二十一年の年季で弟子入りし、その間の食いぶちやけいこ代は家で出すことにして、もし、私の方で勤まらなければ（親方に）縁切り金を出す」という契約がなされている。瞽女の修行に出ることが決まるとすぐに（五歳の四月）、針みず（針孔）への糸通しから訓練が始まっている。初めは畳とじ針、次に寝具とじ針、その次は長みず、そして丸みずとだんだん細くなる。「おら、絹の着物なんか着

ないから、こんな細い針に糸を通すのなんかいやだ」といって泣いたことがあったという。三味線や唄を教わるのは七つになつてからである。

ハルさんが「口には出さなかったが、本当にいやだった」という寒声（かんごえ寒中、外に出て大声で唄の練習をすること）のすさまじさには読者も身を切られるだろう。冬のさなか、「朝は五時から七時まで、夜は六時から十一時まで一日二回、休みなしでうたう」のである。七歳のハルさんは「四時半頃になると必ず目をさまして自分で支度をして出た。もし起こされたりすると朝飯抜きにされたから、一日も寝忘れてりするとはなかった。着物はさらしの下着一枚、そして赤い木綿の腰巻きをつけて、その上ネルの単衣を着てかっぱを着る。頭には帽子をかぶり、素足にワラジをはいて、雪の中で杖につかまっ



て唄をうたった」というのである。

それにしてもハルさんの記憶の確かさには舌を巻かずにはおれない。艱難と辛苦に満ちた一生が実に細かく再現されていることには驚くほかない。ここでは、一読者としての筆者にとってやや本筋から離れたことではあるが、驚いたことがあり、そのことを記しておきたい。ハルさんが十三歳の折りのことである。ある村に泊まったとき、年頃になったハルさんをあてにして、村の若者達が「這い」に来るかも知れないと家のお父さんが言う。そして、たとえ夜這いに来ても注意すると後で、「田んぼに入って稲を引っこぬいたり、畑の作物を荒らしたり」するので放っておくが許してくれと言う。実際、その夜、青年達が這いに来て、「どうしても用事をたせ」とせまる。ハルさんは「おらは殺されたって用事はたさない」と断る。一時間以上も押し問答をした末、青年達はあきらめて帰っていったというのであ

る。村の荒くれ達の夜這いにも、同意がなければ強制はしないというきちんとしたルールがあったことが分かる。

最後に、もう一つ、『渡辺荘の宇宙人』という快著に触れておきたい。これは福島智さんという全盲、全聾の青年がみずからの生い立ち、現在の日々の生活を記したものであるが、想像するにあまりある困難と苦勞の生活を驚くほどの明るい筆致で描いておられる。福島さんのご両親、そして福島さんの妻になられた女性のご努力にも敬服する。福島さんは今年四月から東京大学先端科学研究所の助教授を務めておられる。

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

☆水上 勉『はなれ瞽女おりん』新潮文庫

☆桐生清次『最後の瞽女 小林ハルの人生』文芸

社、二〇〇〇年十一月刊(本書は『次の世は虫に

なっても』というタイトルで柏樹社から一九八一年に出版されている

☆福島 智『渡辺荘の宇宙人』、素朴社、一九九五
年刊

私たちの未来を探し求めて

小林 瑠以

私が紹介するのは、『今、赤ちゃんが危ない―母子密着育児の崩壊』（田口恒夫、自費出版、二〇〇〇年）（注）と『子どもの心と言葉を育てる本』（田口恒夫、リヨン社、発売・二見書房、二〇〇〇年）の二冊である。

前者は田口自身によって書かれたもので、後者は、木山憲世が三年間田口のもとに通って田口が話したものをまとめたものであるが、それぞれに別の良さがあるから両方読むことをお勧めしたい。

田口恒夫（一九二四〜）は、日本における言語障

害治療のバイオニアである。田口は、機能障害がないにもかかわらず、普通に言葉話すようにならない子どもたちの出現に、言葉は「関係」ではないかと考え、言葉話さない時期に形成される母子の絆の意味を考えた。十数年前からは、栃木県で自給自足を目指した百姓の暮らしをしている。

田口は、『今、赤ちゃんが危ない』で、人間の心の発達の根幹部分が形作られるこの時期の大切さと、母子が密着してこの時期を過ごすことの大切さを伝えたくてこの本を書いた、と言っているが、私は、言っていることは子育てであっても、田口は子育てをはるかに越えるものを見ているような気がしてならない。

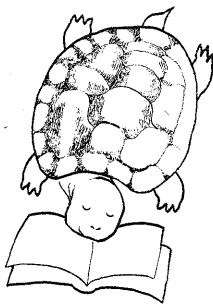
田口は、子育てを言うにあたって、ひとつのことしか言わない。例えば田口の次のような母親、父親へのメッセージにそれが表れている。「蓄積した教養や世間体などというばかげた常識をかなぐり捨て

て、子どもを包みこんであげてください。それだけです。そんなことをバカのひとつ覚えのように言っているオヤジがいたなあと、思いだしていただければ、それで十分です。」（『子どもの心と言葉を育てる本』）。このような表現は、田口のものごとの核心を感じ取る力、つかみ取る力の強さなのではないだろうか。

言葉を話さない時期に形成される母子の絆が人間の心の根幹だとする田口の視点からは、これまで見えなかったものが見える。

『今、赤ちゃんが危ない』には「ほんとうの勇氣、ほんものの愛国心」と題された文章がある。

（『子どもの心と……』にも、同様の記述がある）



この文章では、太平洋戦争末期の特攻の学生たちを題材に、勇気とは何かということが論じられている。田口自身も、かつて、海軍飛行予備学生であった。田口は、次のように言っている。

特攻隊員となるべく訓練を受けていた自分も周りも、それまでは、みんなただの腰抜け学生だった。本土が日夜空襲にさらされる危機的状況の中で、故郷に残した母や姉を守るのは自分しかない、と思つた時に、ひとりの臆病な学生は一変した。勇気とは、自分のかけがない人が危ないというような状況に直面した時の、やさしさである。そのやさしさのとは、生まれてすぐの母子関係に端を発する他者との太い絆である。

私は特攻に関する本を何冊も読んだことがある。それは、たまたま、小田野正之（一九二三―一九九七）という私の音大時代の声楽の恩師が、数少ない特攻の生き残りであつたからである。小田野は、今

の時代の軽さのようなものに身を置けない私が、深い安堵を覚えることができた稀な人である。私は、私を通じ合うことのできる相手が何故特攻の生き残りなのか、どうしても知りたかつた。

しかし、いくら特攻に関する本を読んでも、やはり戦後生まれの私には、特攻の学生たちは理解できなかった。私には、特攻の学生たちが言葉による理解を越えた存在に思われた。しかし、田口の「ほんとうの勇気……」を読んで、そうではないことが分かつた。

人は、想像を絶する危機に出会つてもなお、他者との強い絆を意識できれば、誇りを失わず危機に立ち向うことができる。そのことを体現したのが特攻の学生たちだったのでないか。

特攻の学生たちと戦後生まれの私では、生きていく状況はあまりにも違う。それは越えるには高すぎる壁であるように感じてきたが、彼らの心にある

ものが誰の心にもある人間としての普遍であることが分かった時、その壁はもはや壁でなくなってしまう。

言葉もしゃべらない時期の母子の絆こそ人間の心の根幹だという田口の視点からは、時代の壁を越えたものが浮かび上がる。

田口は、表面に現れた行動としての勇気の奥にあるものをとらえた。勇氣とは何かと問いかけることは、人の心の根幹部分に何かがあるのかと問いかけることと同じであった。田口が問いかけているのは、結局人間とは何かという問題なのではないだろうか。それが、田口の視点を持つはかり知れない可能性なのではないだろうか。

「居心地のいい家族以上に大切なものなんてない」
（『子どもの心と言葉を育てる本』）という言葉にも、感動を覚えた。私は、仕事は細々としかやっておらず、「家庭がほとんどすべて」であるような生

活をしている。これは、ひとえに自分の人生を自分で選び取ってきた結果であるのだが、それでも、そのような自分に開き直ることは難しい。田口のこのような言葉には、感動する。

私たちの時代が、人類が一度も経験しなかった便利さや豊かさを実現した一方さまざまな問題を抱えてしまったことは、今や誰もが、多かれ少なかれ感じていっているのではないだろうか。

例えば、自然はもはや当たり前のようにそこにあるものではなく、意識して守るものになってしまった。突き詰めれば、人間だって同じなのではないだろうか。人がいれば人の暮らしがあり人情があるといった時代は、もう過去のもので、人が人間らしくあるためには、何が人間らしさなのか、考えて取り戻すような時代を、我々は生きているのではないか。

田口のとらえたもの、それは、人間がこれから先

長い時間をかけて、ほかならぬ人間自身をとらえ直すための出発点なのではないか。(音楽教室主宰)

注 ならずな出版(電話・〇三―三二六―七二九一)が取り扱っている。

「健康」再考

首藤 美香子

さあ、夏休み。解放感でいっぱいの子ども達に対して、親や保育者が真っ先に口にするかもしれない、「早寝早起き」「規則正しい生活をしよう」「海や山など自然の中で思いっきり遊んでみよう」「真

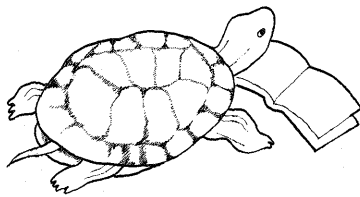
夏の太陽の下で身体を鍛えて元気で丈夫になろう」といった言葉ではないだろうか。冷房の効いた室内でゲームに没頭するなんてもつてのほかとばかり、朝早くから小学生と共に飛び起きてラジオ体操の列

に並ばせ、炎天下のなか水遊びに親ませ、郊外で自然の外気に触れる機会を作り、甘いものや冷たいものを制限し、子ども達が「おもしろくてためになる」ような遊興娯楽を求めて、大人は大汗をかきながらお子様サービスマン満載の「格闘する夏休み」を迎えることとなる。

こんなふうには私達は、子どもの生活において子ども達が「健康」であることに大きな価値を置いている。子ども達の健やかな成長発達を願い、病気に打ち克つ強い身体とそれを基礎に何事に対しても明るく前向きに取り組む積極的な意志を育むことは、大人の最低限の責務であると考ええる。子どもは身体が第一の資本であり、「健康」でさえあれば人生においてどんな可能性をも啓いていけるであろう、そんな期待のもとに、「休み」といえども一日だからと勝手気ままに過ごすのではなく、「適度の運動」と「正しい娯楽」、「十分な睡眠」と「栄養バランス

に配慮した食事」を柱にして、規則的に毎日を送れるように子どもの生活を組みたてようとする。それ自体、決して揶揄すべきことでも非難すべきことでもない。ただ、「健康的であること」に縛られた窮屈な夏休みではなく、もう少し肩の力を抜いて「堂々と怠けてのんびりした」夏休みもいいのではないか、そんな提案を含めて、「健康」の歴史を紐解いた一冊の本を紹介してみたい。

育児や保育の指針が多くの場合、その時代の社会情勢や文化的要請を反映しているように、現代において我々は「健康」を維持増強するためにはどんな努力も時間、コストも惜しまない「健康信仰」の只中に生きているといっても過言では



ない。「健康」の日本史』（北澤一利、平凡社新書）は、我々が自明視する「健康」という概念は実は明治維新前後に創製されたもので、それは単に医者が治療の目標とするような病氣から解放された状態を意味していたのではなく、近代化の過程で避けて通れない軍事政策や教育政策において、一般大衆の怠惰や自暴自棄を改める啓蒙のために効果的に使われた、いわば「国民の身体」に対する「国家権力による干渉」であったことを突き止めた。

北澤によれば、「健康」概念は江戸時代の終わりに西洋医学と共に導入され、「身体のすべての器官が過不足なく正常に働いている状態」というように生理学的に解釈されたという。それは儒教道徳に根ざし「欲をつつしむ」「善い」生き方の実践を示した「養生」とは大きく異なり、身体を「脆弱」で「未熟」なものと規定し、年齢や性別を考慮し「発育発達」段階に応じて「強度」や「頻度」を適切に

配分した「正しい運動」によって「強く鍛えて」いこうとする「改良」志向が背景にあったという。そして、「健康」の獲得は生理学的な法則に基いているが故に、その測定の方法や技術は常に改良されて正確さや精度を増し、どの程度健康であるかどうか客観的に判断される。結果として、人々はそうした健康を測定する客観的な尺度を自己内面化し、誰がみていなくても、しぶしぶと時として「喜んで苦しみながら」、自発的に健康法を実践していくようになったのだという。

「健康」の普及は、江戸時代の武術のようにもともと優れた体格や勇敢な精神をもつ武士などの特権階級を対象にしたのではなく、軍隊や学校での「体操」を通じて、庶民階級の筋肉や循環系統の機能の向上が目指され、特に子どもや非力な人間を対象にした場合により効果を発揮したという。ここで、「体操」を通じて求められたものは、ある特定の能

力の開花ではなく、最低限の身体能力の向上と集団の中で号令とともに一斉に秩序正しく行動する能力であったという。興味深いのは、明治二十年以降の運動会の広がり、学校に通う子ども達だけでなく親や学校の周辺住民に至るまで「健康」の重要さを認識させる契機となったという点である。

そして大正以降、「身体」の生理学的な発育発達のために行われるはずであった「体操」や「運動」が国民精神の高揚や道徳の向上のために行われるようになっていった。例えば、夏休みにおなじみのラジオ体操は、昭和三年に通信省簡易保険局によって企画されたものだが、中産階級以下の「健康」の保持と増進を目的にされ、ラジオという新しいメディアの勃興を背景に、「同じ時間」「同じリズム」「同じ体操」を行うことによって、「日本人としての体格や連帯感」を養う日本人のための特別な体操であったのである。ラジオ体操については、国民の身

体を西欧的基準に従って壮健にするという役割を担わされ、毎朝定時に日本全国を同時に動員する戦時下ファシズムの象徴であったという指摘が既になされてきたが、北澤もラジオ体操の普及は、身体に生理的な異常をもたないという明治維新以降築かれてきた健康観に加えて、国民としての道徳的な貢献が要求されていったと「健康」概念の変化を読み取っている。

以上、「健康」をキーワードにした日本近代史の野心的な読み解きを紹介してきたが、かつて「正常」という発達指標がもつイデオロギー性が看過され、その神話の脱構築が保育現場で試みられてきたように、個人の奮闘努力によって「未熟」「脆弱」「不良」な身体を生理学的な理想形に「改良」し、日常生活を規制するという過度な「健康信仰」についても、ひとたび思いを巡らしてみるといいかなものであろうか。本書は、既存の健康概念に

縛られない子どもの「健やかさ」を再考しようとする親や保育者の思索の一助となるにちがいない。

さて最後に、健康や身体、スポーツについて、歴史的文化的に分析した書物を一部挙げておきたい。

ラジオ体操が日常における時間感覚や身体観の近代化にどう関与したかについては、『ラジオ体操の誕生』（黒田勇、青弓社）が、運動会が子どもの身体とそれを圍繞する学校に対してどのような国家レベルの思想をどう浸透させていったかについては

『運動会と日本近代』（吉見俊哉ほか、青弓社）

が手に取りやすいだろう。また「健康神話」の大衆化を担った郊外住宅地の開発と民衆娯楽の開花を、

遊園地の歴史から追跡した『日本の遊園地』（橋爪紳也、講談社現代新書）は、懐かしい遊具の写真

が満載で楽しめよう。夏の風物詩、甲子園野球が織り成す文化的パフォーマンスを説明した『甲子園

野球のアルケオロジー』（清水論、新評論）は、

メディアが作り出すスポーツの「物語」のからくりを知る手がかりとなろう。「健康で清潔な生活」を形成するに不可欠とみなされることの多いスポーツについて、その成立と変遷を近代社会を写し出す鏡として考察する『スポーツを考える』（多木浩二、ちくま新書）は、オリンピックやプロサッカーに対する見解が興味深い。

（北京市在住）



幼稚園誕生の時代

—— 関信三の葛藤 ——

国吉 栄

(九) 『幼稚園記附録』——幼稚園とは何か

『幼稚園記附録』の原典について

『幼稚園記』が出版されてからちょうど一年たった明治十年七月、『幼稚園記附録』が出版された。

これまでほとんど論じられたことはないが、『幼稚園記附録』にはふたつの原典がある。ひとつは、エリザベ

ス・ビーボディー (Elizabeth P. Peabody) と彼女の妹
メアリー・マン (Mrs. Horace Mann) の共著“Moral
Culture of Infancy and Kindergarten Guide” (J. W.
Schenhorn & Co.) で、これについてはよく知られて
いる。これが全体の四分の三を占めていることから、同
書を『幼稚園記附録』の主原典とすることに問題はな

い。ただし、関信三が訳したのは、このうち、ピーボデーの Kindergarten Guide の部分のみである。もうひとつの原典が、ウェルチ (Welch, A. S.) 著 “Object Lessons Prepared for Teachers and Primary Classes” (A. S. Barnes & Company 1873) で、後部に追加される形で収録されている。

『幼稚園記附録』にふたつの原典があるのはなぜだろうか。主原典であるピーボデーの書はアメリカで最初に書かれた英語による幼稚園案内書で、米国幼稚園史における記念碑的な書物であった。初版は一八六四年であるが、刊行後数年して、Kindergarten Guide の部分が大幅に変更された改訂版が出された。関信三によって『幼稚園記附録』の原典とされたのは、この改訂後の版である。関信三が翻訳すべき書として、このように重要な文献を選択したのは大変意味のあることであったが、しかし不思議なことに、彼はピーボデーの書物を、同書が本来そうであるような独立の書物としてではなく、『幼稚園記』の「附録」という形で出版した。しかもさらに

その付録として、第二の書まで加えているのである。どうしてこのような変則的な構成が行われたのであろう。

その直接的な理由は、それらがドゥアイ (『幼稚園記』原典の著者) の推薦書だったことにある。実際には、ドゥアイはピーボデーの前掲書とカルキン (Calkin) の “Primary Object Lessons” を推薦していた。関信三は、ぜひとも両書を翻訳したいと思ったが、カルキンの書はすでに文部省から出版されることが決まっていたため、やむなくその代わりとしてウェルチの “Object Lessons” を入れることにしたと思われる。けれども同書は本来小学生向けであったため、関は「ヤヤ高尚ニシテ唯其長齡兒女ノミニ授クヘキ例タルヲ以テ其幼齡兒女ニ於ルヤ教師宣ク斟酌スヘシ」と注釈を付けざるを得なかった。なお、カルキンの前掲書は、明治十年五月に、「加爾均氏庶物指数」として文部省から出版されている。

こうしてみると、『幼稚園記附録』は、ドゥアイの書を主著とし、その推薦図書をもってそれを補完強化しよ

うという、非常にはつきりとした意図を持って構想された作品であったことがわかる。彼はドウアイが推薦した二書を加えることによって、彼の『幼稚園記』を完成しようとしたのである。『幼稚園記』の翻訳、幼稚園着工、竣工、開業、園長就任と、慌ただしい動きが続くなかで、彼は休むことなくこれらの翻訳に着手した。頼まれた仕事ではない、本当はまだ誰もよく知らない幼稚園というもの。その完全なる知識を世に提供すること、彼はそれを自らの責務と考えていたのではないだろうか。

幼稚園とは何か

Kindergarten Guideの最初の章は、そのものズバリ、KINDERGARTEN-WHAT IS IT?、「幼稚園とは何か」



である。関信三は第一章「園説」としてそれを訳している。今回はこの「園説」について考えることにしたい。「幼稚園とは何か」を手さぐりで尋ね求めていた関信三にとって、これは願ってもない章であつたらう。原典は、外国から移入された幼稚園に出会ったピーボディーが、彼女なりに実践したのちに、批判的に再検討を加えて書き直したものである。ピーボディーと同じく、海外から移入したばかりの幼稚園で模索している関信三にとって、この章は格別のものであつたに違いない。

ところが、私の予測はみごとに裏切られた。『幼稚園記附録』を改めて読み直して最も驚かされたのは、「園説」のあまりの短さだった。おもしろく読み始めたら、突然ふっと終わってしまった。何かの間違ひではないかと前後の頁をめくってしまった。『幼稚園記附録』は和綴じで四十二枚八十四頁、一頁は十行からなる。そのうち「園説」は二頁半、つまり、全二十五行。それが『幼稚園記附録』第一章のすべてなのである。

彼が訳したものの原典での位置を知るために、同章全

体を要約すると、およそ次のようになる。

幼稚園は旧来の専制的な学校とは違う。フレーベルが自から創設した施設に「子どもの園」（すなわち幼稚園）という名前を与えたのは、その名前によって、子どもを扱う精神と方法を象徴させるためであつた。フレーベルの「子どもを扱う精神と方法」とは、園丁がそうであるように、教師、すなわち「心の園丁」が、子ども独自の個性を無視したり、子どもの性格を前もつて決定する力が自分たちにはないことを自覚し、子どもが本来持つてゐるものが、善と美に向かつて―その目的は神であるが―よりよく開花するように助けることである。また、一定の時期になれば、子どもは子どもの十全な社会の中に置かれなければならない。子どもは、大人の洞察力に支えられた子ども社会での経験を通して、内的にも外界とも調和した成長をすることができる。幼稚園は、子どもたちが自発的に活動し、想像力を伸ばし、自分を自由に表現し、他者と協調し、宇宙の秩序を知り、良心に心を向けることができる場所である……。ピーボデーは以

上のことを強調しながら、キングダーガルトナーのあり方、幼稚園の具体的な方法、たとえば恩物を使う目的や方法などについて説明し、積極的に幼稚園を開設することを勧めている。

このような内容のうち、関信三が訳したのは、フレーベルが彼の施設に「子どもの園」と名づけた理由を述べたパラグラフである。幼稚園論の基底となる欠くべからざる部分ではあるが、全体から見ればいわば導入部であつて、それだけを取り出して「園説」とするには無理がある。また、同パラグラフのうち最後の数行は訳していない。客観的に見て、関信三はピーボデーが書いたものの全体を見渡すことなく、文脈と離れて任意に一カ所だけを取りだし、それに「園説」と冠したと言わざるを得ない。

ドゥアイにはほとんどなかった幼稚園論に関信三はここで初めて出会うことになったのだから、彼がそれをどのように受け止めているかは非常に興味あるところであつた。そのピーボデーの幼稚園論を彼はこのように

扱っていたのかと、実に意外な思いだった。

一体これはどういうことであろう。幼稚園紹介を急がねばならない関信三にとっては、やむを得ない現実的な処理だったと考えるより他ないのだろうか。けれどもどうも納得できないまま、関信三の他の著作も読み進めているうちに、このことを考える上での手がかりを見出した。彼はこの短い「園説」を、多少の字句の変更を加え、あるいは途中で別の文章を入れるなどして、彼のすべての著作の中で繰返し使っていたのである。もしこの「園説」が彼にとって満足のいくものでなかったとしたら、はたしてそれを他の著書にも繰返し使ったりするだろうか。関信三にとって、「幼稚園とは何か」の答えは、「園説」において必要かつ十分に語り尽くされていたに違いない。



「園説」

では、関信三の「園説」とはどんなのであったのか、全二十五行を紹介してみよう（行頭番号筆者）。

第一章 園説

- 1 幼稚園トハ即チ幼稚子女ノ遊園ナリ而メ其創設者フ
- 2 レベル氏ノ目的ハ幼稚園ノ精神及ヒ其方法ヲシテ果
- 3 メ其名ヲ適切ナラ令ルニ在是フレベル氏ノ身自ラ自
- 4 然法ノ發明者ト称呼セシ所以ナリ凡ソ園圃ヲ耕植ス
- 5 ル者ハ必ス先各種草木ノ天質ニ異同アルヲ察知シ而
- 6 メ其天質ニ適合シ地質ノ濕燥及ヒ氣候ノ寒温等ヲ計
- 7 軟セサル可カラス是其急務ニシテ一日モ欠可カラサ
- 8 ル所ナリ故ニ草木ノ天質如何ヲ顧ミスシテ其開花結
- 9 実ノ美榮ヲ期スルモ豈得ヘケンヤ是ヲ以テ園丁ノ最
- 10 モ老練スル者ハ必ス其天工ヲ養成シ曾テ基本質ヲ逆
- 11 制セス草木ヲシテ不羈自由ノ境ニ生長セシム然ト雖
- 12 モ野外濫生ノ蔓草雜木ノ如ク荒蕪ノ地ニ棄テ、顧ミ
- 13 サルニ非ス常ニ注意添力シテ其疾蟲ヲ攘斥シ其穢物

- 14 ヲ洗除シ或ハ荆棘稗莠ノ蔓生スルトキハ勉テ耕鋤シ
- 15 以テ保養怠ラス此ノ如クナルトキハ必ス将来花実ノ
- 16 開結ヲ期シテ待ヘキナリフレベル氏夙ニ茲ニ著目シ
- 17 自ラ謂ラク無性ノ草木既ニ固有ノ美栄ヲ完成スルニ
- 18 ハ必ス本質適切ノ培養法ヲ施サ、ルヲ得ス況ヤ有性
- 19 ノ人類ニ於テヲヤ嬰兒ト雖モ必ス適切ノ教育法トカ
- 20 ルヘカラス此ニ於テ多年其經驗ニ従事シ以テ嬰兒ノ
- 21 性質ヲ究知シ遂ニ幼稚字ノ一科ヲ發見セリ抑古來偶
- 22 嬰兒ノ教育ニ注意スル者アリト雖モ其固有ノ活發ナ
- 23 ル氣力ヲ制止シ唯窮屈ノ中ニ生長セシム故ニ其天稟
- 24 ノ精神ヲ暢達シ固有ノ知覺ヲ發揮スルヲ得ス此弊習
- 25 ヲ看破セシハ実ニフレベル氏ノ卓識ト謂ツヘシ

関信三の「園説」とは何か。要約すれば、幼稚園とは、植物が天質に合う環境を整えられ適切な世話を受ければ自ずと開花結実するように子どもを教育する所、ということになろう。関の訳文ははじめの四行を除いて全体に読みやすく、わかりやすい。日本人にとってなじみ

深い比喩が使われているからであろう。文章にも張りがある。その描写があまりにも自然で、一気に読ませてしまうので、もしその前後に「フレibel」という名前や「幼稚園」という語がなければ、それが外国文献の翻訳であるとは、誰も気づかないのではないかと思われるほどである。

関信三にとって、子どもの「天稟ノ精神ヲ暢達シ固有ノ知覺ヲ發揮」し、「将来花実ノ開結ヲ期シテ待」つ、というフレibelの幼稚園は、彼に未来への希望を抱かせ、彼の精神を励ますものであつたろう。彼は、幕府崩壊、開国、開教という激変とともに人生を歩み、その過程で徹底的な挫折と失望を味わつた。その彼が今、凜として樹木が伸びゆくように、ふくいくと草花がかおるように、豊かに果実が実るように、おさなごの成長を信じる幼稚園に出会つたのである。

けれども、この「園説」を繰返し読むと、その多くが、特に四行目から十六行目まで、つまり中心部分のすべてが、植物の育成の描写に終始していることに、少し

違和を覚える。また、「園説」を原典と詳しく対応させてみると、十六行目以降は該当パラグラフにも、同章全体にもその原文がないことに気づく。

ということとは、彼がピーボデーの「幼稚園とは何か」の章から翻訳したのは、全二十五行の内、さらに少なくとも、前半の十六行のみということになる。しかも最初の四行以外は、ひたすら植物の育成の描写のみを取り上げているのである。まるで、彼にとってはそれのみが必要だった、というかのようである。前述のように、彼は該当のパラグラフを途中までしか訳していない。さらに、途中で切り上げた文章に、別の文章をつなげている。彼の意志で二つの別のものをつなげたということからすれば、「園説」は「翻訳」ではなく、「創作」ということができよう。



日本では古くから子育てが植物の成長に比して語られてきた。そうしたいわば共通の土台の上で、それぞれの時代や背景に応じて、独特の思想や具体的な方法が展開されてきたと言えるのではないだろうか。しかし、関の「園説」では、具体的な思想や方法に全くふれず、ただ比喩のみが掲げられている。しかも草木を育てる上での「技」が、「美」を感じさせるまで高められて表現され、あたかも比喩自体が目的であるかのような趣になっている。

彼はなぜそのように表現したのであろう。彼の「幼稚園の説」と題する論説（『東京日々新聞』明治九年十一月二十八日付）に、次のように大変印象的な記述が見られる。「盆栽家」と「植物家」の比喩である。「彼の天質を顧みず唯人口を是れ競ふ一種の盆栽家なる者の草木を栽培するや其花容を奇とすを喜び故意に天造の花葉を窘盛するを以て却草木固有の美栄を完成するを得ず是れ植物家の肯て取らざる處なり故に園丁の最も老練する者は……」（以下「園説」十行目へと続く）。

関信三が、たとえとして「日本化」の極みとも言える「盆栽」を持ち出していることは、私にはきわめて興味深く思われた。この論説は、彼が後述の講演をした際の際の原稿と思われることと、この時が「園説」が発表された最初であることから、この比喩は、関信三が幼稚園をどのように受け止めたかを初々しく、率直に表しているように思う。

私は『幼稚園記』を読みながら、関信三は自らが翻訳しているものをよく理解していないのではないかと感じていた。おそらく、私の感じ方はそれほどの外れではないと思う。そうした関信三がピーボデーの書を読み始め、「幼稚園とは何か」の章に植物との比喩を見出した時、彼の心の中にたちまち、これまでになくしつくりした感じ、これだという気持ちが湧き起こったであろうことは想像に難くない。彼の想像力は刺激され、自由な表現が生み出された。それが自然に盆栽の比喩と結びついたのである。関信三がピーボデーの「幼稚園とは何か」から取り出したのは、見知らぬ外来物ではなく、自

らの肌になじんだものであった。彼が無意識のうちに手に入れようとしたのは、思想ではなく、幼稚園が日本に受け入れられるという確信、さらに言えば、自分自身がこれを受け入れて恥じるところがない、という確証だったのでないだろうか。そして、彼はその確証を手に入れたのである。

しかし、ピーボデーによって、そしてもちろんフレーベルによって、「園」に対置されているのは「野」であって、「盆」ではない。幼稚園の「日本化」。いつのまにか、フレーベルの思想が逆転されている。あるいは矮小化されている。

盆栽の比喩は、また、幼稚園が日本に受け入れられた土壌を示唆している。幼稚園はまず、「野」にある子どもではなく、「盆」上の子どもに、子どもの教育に手をかけ過ぎるほどにかけられる、一部の人々に向けて語りかけられた。幼稚園開設直前に東京女子師範学校において、「日本国婦人之会議」という婦人のための集会が開かれた。その二回目の会で、関信三は「幼稚園の説」と

題する前掲の講演を行つてゐる。東京日日新聞によれば、集まつたのは「何れも精神良家の閨秀にて凡そ三百五六十人」であつた。この会で関信三は彼の「園説」を説き、盆栽の比喩を語つた。彼の説も他の演者の講演、「母親の心得」、「一家経済の心得」と同じく、間違ひなく受け入れられた。記者は、「何れも婦人女子の為に成る結構なお咄しで五座りました」と報告している。

幼稚園がアメリカに紹介された当初は、幼稚園はドイツ思想によるドイツ人のためのものであるから、アメリカ社会に導入するのは適當ではないという論が根強くあつた。これは、幼稚園を広く公教育の中に取り入れようと考える人々にとつては、乗り越えなければならぬ高い壁であつた。ピーボディも彼女の多くの著述の中で、それを論破する努力を繰り返さなければならなかつ



た。しかし、関信三の「園説」は当時の人々に無理なく受け入れられた。そして長く、今日に至るまで、当然のごとくに受け入れられている。しかし、そこにははじめから、日本社会に否定されるべき何ものもなかつたと言つた方がむしろよいだろう。

日本の幼稚園は外国文化の移入であるとされる。もちろんその通りである。しかし、はたして本当にそうだったのか。関信三の「園説」は、「フレイベルの幼稚園」の説ではなく、まぎれもなく「日本の幼稚園」の説であつた。関信三というひとりの人間を経て、「日本の幼稚園」が誕生したのである。

「園説」によく現れているように、「幼稚園記」において直訳的傾向が強かつた関信三は、以後しだいに自らの意識的な取捨選択によつて翻訳文を構成する度合いを強めていく。今回は、関信三が理想の幼稚園をめざして著した『幼稚園創立法』について書いてみたい。

編集後記

今、私は『前売券シネマガラフイティ』（ワイズ出版）という本を手にかけています。それはこの中の「前売り券製作にたずさわって」という岸上彰男氏の文章に出会ったことがきっかけでした。今では当たり前前の「前売り券」の誕生の前後を語っているこの文章に魅かれたのです。

岸上氏は、戦後の東和映画が自主配給を始めた一九五二年に入社し、在社二十八年間に封切られた六六七本のうちの五六〇本を直接手掛けた宣伝交渉プロデューサーです。

氏の入社当時は「官給票券」と呼ばれた味もそつ気もない団体割引券でしたが、氏らの宣伝の努力が実っ

て年間の上演本数が増え、「私製票券」が認められ、一見して内容のわかるカラフルな「特別鑑賞券」が誕生したのです。

一九五七年から約三十年間のそれらを年代順に並べたのがこの本なのです。当時の私にとって映画は高価なもので、実際には数えるほどしか見ていないはずなのに、これらの券を見ていると当時の生活のあれこれが連想され不思議に思います。

岸上氏は「手にした時から期待は高まり、恐らく人にも見せては、その楽しみを語ったであろう」と、一枚の券がもつ限りない広がりについて語っています。前売り券の誕生で、映画は、見た人だけのものではなく、見なかった人までもその想像力で取り込んでいった、そんな時代の中に私もいたのです。(A)

幼児の教育

第一〇〇巻 第八号

(二〇〇一年八月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十三年八月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8620 東京都文京区大塚二二一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五二二一

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一一四一九

☎〇三―五三九五―六六一三(営業)

☎〇三―五三九五―六六〇四(編集)

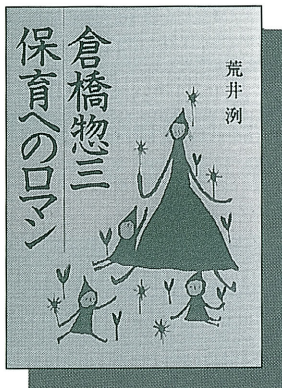
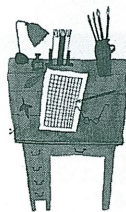
振替 〇〇―一九〇―二―一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレーベル館にお願いします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

倉橋惣三 保育へのロマン

好評発売中



「倉橋は決して古くない」。日本保育界の巨人・倉橋惣三の思想・理論を現代保育の現場に生かす道を明らかにした注目の本。月刊誌「保育専科」に好評連載されたものを中心に書き下し部分を加え、明日の保育現場で使えるように、分かりやすくて確に倉橋理論を解説します。

荒井 洌 著 ■21×15cm・220頁
定価：本体2,000円＋税

子どもに生きた人・倉橋惣三

—その生涯・思想・保育・教育—

好評発売中

倉橋惣三の保育思想を、すべての著作物と周辺の人たちの証言によって説きあかし、これからの日本の保育のあり方を示す。倉橋惣三研究の決定版。

森上史朗 著
■22×16cm・492頁
定価：本体3,689円＋税



キンダーブックの
フレーベル館



21世紀保育フックス

これからの保育はどの方向へと向かっていくのか。
新しい21世紀の保育を展望しながら必要とされる諸問題を根本的に掘り起こし、
確実に保育者を導き育て、将来の保育への指針を与える新シリーズ!

編集委員 森上史朗 (子どもと保育総合研究所代表)
柴崎正行 (東京家政大学教授)
柏女霊峰 (淑徳大学教授)

好評発売中



21世紀保育フックス⑥

保育者の「出番」を考える 今、求められる保育者の役割

吉村真理子 前・東雲短期大学

平成10年に改訂された「幼稚園教育要領」においても「保育者の役割」が強調されています。保育とは、基本的には子どもとのかかわりであり、よりよいかかわりを築いていくために、その質や方法を考えていくのが保育者としての自己研鑽の課題とも言えるでしょう。本書では、保育の世界を演劇の世界になぞらえ、保育という舞台のさまざまな場面における保育者の「出番」について、具体的な実践例をあげながら考えてみました。

B6判 176頁 定価：本体1,200円＋税



21世紀保育フックス⑦

地方自治体の保育への取り組み 今後の保育サービス提供の視点

山本真実 淑徳大学 尾木まり 子どもの領域研究所

さまざまな社会の変化を受けて、保育ニーズや保育サービスもますます多様化しています。新しい時代の保育サービスの考え方や方向性が打ち出されていますが、それらを実際に具現化し、利用者に対峙していくのは、サービスの実施主体である市区町村だと言えます。エンゼルプランの策定後、各地方自治体の取り組みが本格的になりましたが、本書ではその経緯と現状を追いながら、これからの保育と保育サービス提供の視点について考えていきたいと思います。

B6判 180頁 定価：本体1,200円＋税

- | | | | |
|-----|---|------------------|--------------|
| 既刊本 | ① | 新しい教育要領・保育指針のすべて | 森上史朗 著 |
| | ② | 新時代の保育サービス | 柏女霊峰・山本真実 共著 |
| | ③ | カウンセリングマインドの探究 | 柴崎正行・田代和美 共著 |
| | ④ | 子ども虐待の理解と対応 | 庄司順一 著 |
| | ⑤ | 知的好奇心を育てる保育 | 無藤 隆 著 |

<以下続刊>

キンダーブックの
フレール館

定価 五五〇円(本体五二四円)☆